

小金平・立石

小金平遺跡発掘調査報告書

立石遺跡発掘調査報告書

昭和57年3月

佐久市教育委員会

# 序 文

佐久市教育委員会  
教育長 戸塚平一郎

## 小金平・立石遺跡の調査に当って

地域の歴史を知り、地域の文化遺産を守ってゆくことは、地域に住むわれわれ本来の責務であるといえる。

佐久市大字根岸字小金平また字立石遺跡については、佐久建設事務所による国道 142 号線バイパス工事に際し遺跡の発掘調査が余儀なくなつたため緊急発掘調査をし、記録を保存することとなつた。調査は小金平遺跡については昭和 56 年 4 月から 7 月にかけて、また立石遺跡については 57 年 2 月に発掘調査が行なわれた。

本遺跡は岸野の平井部落の可成り傾斜のはげしい東斜面の地籍であり、当地特有の粘土質の強い土壌で覆われているが、特に南側の斜面は層の厚さが數十センチにも及ぶ強い粘土層のみられる場所であつた。現在かわら製造業を営む業者が多い土地柄であるということももうなずけるところであつた。

遺構は、3 棟の住居址が検出された。縄文時代前期の住居址 1 棟、奈良時代の住居址 1 棟、平安時代の住居址 1 棟である。付近の舞台場遺跡とともに綿密な保存対策が要求される重要な地籍であろうと思われるが、開発が急速に進む中で、文化財保護の立場からは危機にさらされていることは否み得ない。

市の開発と文化財の保護と、この二律背反ともいうべき現在の行政を考えると、文化財保護行政の如何にむづかしいかを考えさせられる今日この頃である。調査報告結果をもつて後世に伝える意義は大きい、また現代におけるこれらの示唆を忘れてはならないと考えている。

本調査に当り佐久建設事務所の関係者の皆様、佐久考古学会の皆様のご協力に対し衷心より感謝申し上げるとともに調査団また関係者の皆様に深甚なる謝意を申し上げ、あいさつと御礼にかえさせていただきます。

## 例 言

1. 本書は、昭和56年4月17日～昭和56年7月15日にわたって発掘調査された長野県佐久市大字根岸に所在する小金平遺跡及び昭和57年2月15日～2月28日にわたって発掘調査された立石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、佐久建設事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、林幸彦を担当者とし、佐久考古学会有志を調査員とし、専修大学生、東海大学生等を調査補助員とし、元岸野・根々井・岩村田地区の人々の協力を得て実施した。
4. 本書に挿入した遺構の実測図作成は、調査員・調査補助員があたり、遺物の実測図作成は飯島篤，三石宗一が主に担当し、トレスは茂木智里が担当した。
5. 本書の編集は工藤かよ子が担当した。

調査にあたり、長野県教育委員会関孝一，郷道哲章，臼田武正県文化課指導主事には適切な御指導をいただき、さらに、佐久建設事務所には御理解・御協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

I 発掘調査の経緯 .....	1
1. 調査に至る動機	
2. 発掘調査の概要	
3. 発掘及び整理日誌	
II 遺跡の位置と環境 .....	2
III 層 序 .....	6
IV 遺構と遺物 .....	6

# I 発掘調査の経緯

## 1. 調査に至る動機

佐久建設事務所による国道142号線バイパス工事に際して、佐久市根岸に所在する立石・小金平遺跡の破壊が余儀なくされたため、緊急発掘調査し、記録保存することとなった。

## 2. 発掘調査の概要

・遺跡名	小金平遺跡	立石遺跡
・所在地	佐久市大字根岸3907他	佐久市大字根岸3846-1他
・発掘調査期間	自昭和56年4月17日 至 “ 7月15日	自昭和57年2月15日 至 “ 2月28日
・調査団の構成		
団 長	浅沼 馨 (7月より戸塚平一郎)	団 長 戸塚平一郎
担当者	林 幸彦	担当者 林 幸彦
調査員	大井今朝太, 工藤かよ子 島田 恵子, 三石 延雄 森泉 定勝	調査員 大井今朝太, 工藤かよ子
補助員	飯島 篤, 佐々木宗昭 堤 隆, 三石 宗一 五十嵐博子, 小山 岳夫 本橋 宏巳, 茂木 智里	補助員 飯島 篤, 堤 隆 三石 宗一, 小山 岳夫 五十嵐博子, 茂木 智里 本橋 宏巳, 佐々木宗昭
協力者	上野まさ子, 上野けさ子 碓氷智恵子, 萩原こまよ 萩原 好子, 片井よし子 井出うまし, 碓氷ともえ 掛川ますひ, 上野みち子 橋詰 操, 牧野 こと 工藤 郷子, 掛川 祐次 小林 幸雄, 篠原 浩江 沼田 昌晴, 田中 明彦 大井 哲夫	協力者 牧野 こと, 篠原つる子 工藤 郷子, 相沢 邦彦 細萱 健郎, 甘利 正彦 篠原 基明, 篠原 浩江

## 3. 発掘調査日誌

昭和56年4月17日～7月15日 調査区設定及びグリッド設定し、器材の搬入及びナント設置する。表土は重機により削土し、グリッドを展開し遺構の確認をする。検出した遺構は覆土掘り下げと併行して平面図及び撮影作業を行う。11月～1月は遺物水洗い・実測及び図面の修正を行い、2月～3月に原稿作成及びトレスをし、編集発行。立石遺跡は、57年2月15日に器材搬入、表土を重機によりトレンチ式に削土する。遺構の検出作業を平面的に行う。3月に遺物水洗い・実測及び写真撮影、併行して原稿作成し編集・発行。

## II 遺跡の位置と環境

野沢平を北西流してきた千曲川は、村の一キロほど東方で流れを西にとり、さらに相沢の断崖にぶつかり北に流路を変える。中沢川・宮川は、北東に方位を指す沢筋に沿って流れ下県西で千曲川に合流する。これらの河川の流域平坦地には、今岡から下県にかけての千曲川西岸の段丘が形成されている。この段丘より漸次西方にむけて高くなる緩斜面が見える。そしてこの緩斜面は 科山塊の裾野東端の丘陵にあたり（平井・沓沢・糠尾・熊久保を結んだ地形）これらの地帯より西方は、河川より比高のある狭い緩斜面を持った平坦地がうかがえる。

このような地勢を持つ村内には、随所に原始古代の人間が生活していた痕跡が存在している。中沢川・宮川に沿った狭い平坦地には、古くから人々が住みついている。第一図 27 の榛名平遺跡では、今から一万年以上前という年代が与えられる珪質頁岩製の尖頭器（ポイント）が甘利忠良氏の表採により確認されている。この尖頭器の形態や製作技法は、県内天竜川右岸の上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡出土の尖頭器群の中に類例をみる事ができる。この神子柴遺跡は、旧石器文化と新石器文化の文化移行期に位置する文化的様相を呈しているといわれている。昭和 53 年 3 月に本刊行会が行なった榛名平遺跡確認調査の結果は、定型の石器は出土しなかったが多量の割片（尖頭器などを製作する時に生じる小さな割れた石）を確認している。この時期の遺跡で明確なものはまだ市内では確認されていない。が、榛名平遺跡出土のものは、200 万年前に発見した人類が長い長い年月「土器」という器を発見できずに生活していた時代の最終末に位置づけられよう。今後、村内の西方の沢筋一帯に発見される可能性は少なからずあろう。榛名平遺跡の出土石器を使用していた人類の生活は狩猟・魚撈・食用植物の採集等によっていたが、今から約 1 万数千年前から気候は温暖化し、火山活動もようやく小規模になってきた。その結果、針葉樹林は北方へ、また、より高山へと退位していき、代って闊葉樹林が拡大し、クリ・クミナラ・クヌギ等が豊富な食物を供給してくれるようになった。これらのものは、煮沸という加工を経て食生活を満たしてくれる。土器発生の要因は多々あろうが、やはり煮沸が大きな要因となったのであろう。これに時期を同じくして人類は、弓矢という飛び道具を出現させている。狩猟には、以前の槍や手に持つ斧よりはるかに有効な武器である。こうして、日本の縄文文化（新石器時代）は幕をあけるのである。

縄文時代は土器型式等によって古い時期から、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期とに区分される。

早期の遺跡は、河川との比高の高い所に分布している。これは、沖積地にあつてははまだ河川が氾濫・侵蝕をくり返していたためで、現在のように安定したものでなかったこともある。宮川をさかのぼった東立科 A 遺跡（第 1 図 23）では、早期（7～8 千年前）の押型文土器が採集されている。

前期～後期は、ほぼ同様な標高（7～8百メートル）に分布している。前期は、香沢の坪ノ内・大日影遺跡で、関山式土器が出土している。この時期の住居址群は、小宮山の後沢遺跡（第1図24）で6軒検出されている。香沢の両遺跡でも住居址群が埋蔵されていると思われる。中期では、大日影・中村・十二下等の遺跡（第1図14・20・17）があり、中村遺跡からは重田悦夫氏所蔵の加曾利E式土器の把手付深鉢等が出土しており、代表的なものである。他にも池田重正氏所蔵のキャリバー型土器が出土している。後期では堀ノ内式土器の注口土器・深鉢が、大日影遺跡で確認されている。

これら代表的な縄文時代の遺跡は、熊久保から平井にかけての藝科山塊東裾野が平地にせり出している地点（前述の標高）に集中してみられる。

さて、狩猟や採集などの手段によって食を得ていた人々は、大陸から水稲耕作や金属器というより確実性を持つ生産手段を持った弥生文化は、紀元前後の短期間のうちに日本各地に広がり、その文化は前・中・後期と三期に区分されている。県内には前期末に南信の飯田地方に伝播しているが、全般に広がるのは中期に入ってからである。市内では深堀・後沢・北西ノ久保遺跡が代表的なもので、特に北西ノ久保遺跡においては、大規模な集落が確認されている。村内ではまだ多くの資料はないが、舞台場遺跡（第1図8）において栗林式土器片が出土している。後期になると市内では随所に分布し、特に岩村田地区と野沢地区に多い。この時期の土器は赤く塗彩されており、実に華やかなものである。村内は、二東厨・唐松坂・舞台場遺跡がその主な遺跡で、隣接する旧前山村の後沢遺跡では36軒の住居址群が発掘調査されている。

弥生時代に営まれた遺跡とはほぼ重なるように、古墳時代の遺跡が分布している。そして、この集落に近接する場所や、集落を見渡せる小高い場所に古墳（高塚ともよばれる古代の墳墓）が築造されている。中央では、大和朝廷が全国的規模で統一國家を成立、発展させていく時代にあたり、古墳がその勢力とともに地方に波及する。この古墳に代表される文化が続いた時打を古墳時代という。

この時代の土器には、土師器と須恵器がある。土師器はその特徴から関東地方において四世紀代を五領式、五世紀代を和泉式、六、七世紀を東高式とに編年されている。佐久地方においては、五領期の住居址は今井西原遺跡で1軒検出されているにすぎない。村内でも岸野小学校に出土地不明の五領期から和泉期にかけてと思われる器がある。村内で多く認められるのは、鬼高期の遺跡であり、唐松坂・坪ノ内・下泉・伊勢山遺跡があるが、いまだ調査されたものがなく詳細不明である。市内では、上桜井北・跡部町田・上の城等の遺跡で、住居地群が検出されている。

古墳は、村内に十数基存在するが、すべて円墳である。火の雨塚・葦陵・十二・釜塚・坪ノ内・籠の峯古墳等で、いずれも径10～20メートルの小円墳である。いわゆる古式古墳はみられず、ほとんど7世紀から8世紀前半といわれている。副葬品は玉類、剣等であるが、火の雨塚古墳では、埴輪が出土しており、佐久地方でも数少い

古墳である。

次に奈良時代の遺跡であるが、歴史区分がわずか百年に満たない時にあたり、考古学的資料で該当するものは極めて少ないのが現状である。土師器等の特徴より関東地方では真岡期という文化期に区分されている。

平安時代に入るとその特徴を示す遺跡が数多く存在する。従前よりの伝統的容器の土師器はもとより、須恵器・灰釉陶器等土器の種類は豊富であり、市内の上桜井北・上の城・三塚鶴田遺跡等で住居址群が調査されており、資料は多い。須恵器は古墳時代においては遠く岐阜県等からの移入ものがほとんどであったが、この時代になると佐久地方でも、北御牧村や浅科村で窯業が行なわれた址が認められ、供給されたと思われる。これらの地帯は良質の粘土を産出し、窯を構築する斜面を備え、水・燃料も豊富である。村内の西側一帯にもこれらの条件を満たす地があり、今後の発見が期待される。

集落としては、古墳時代のものとはほぼ同様な位置にあったと思われる。

さて、この時代で村内の注目される遺跡は、休石遺跡であろう。従来、宮川・大長田・休石で計6個もの須恵器大甕が出土している。しかも内部には、長頸壺・小型甕等が入れられており、その性格が論じられてきたが、昭和53年3月本刊行会が主体となって行った確認調査で、いよいよその性格が本格的に追求された。休石遺跡確認調査概報より要点を列挙すると、配石址群が炭化層を伴って検出された。その位置は、昭和43年5月の大甕3個の出土地点と一致する等々、火葬墓としての性格が非常に強い状況をもった遺跡であることが判明した。

火葬墓とは、終末期古墳が消滅するのに決定的作用をおよぼした仏教的思想にもとづく墳墓であり、中央では大化薄葬令以後多く行なわれている。

中部地方の火葬は、特定地域で7世紀より行なわれている。中部地方全域に流布を見るのは9世紀から11世紀といえよう。このような墳墓の立地は、丘陵の東や南斜面・突端部・台地上などに営まれているといえる。そしてその外郭施設として、方形石積・五輪塔石造姿等がある。以上は火葬墓についての遮那藤麻呂氏の論文である。休石遺跡の場合骨蔵器等の特徴から時期は9世紀から10世紀に位置付けられよう（休石遺跡確認調査概報）。

以上、村内の考古学的資料をかけ足で紹介をしてみたが、特に古墳時代以降の事象は、文献史学との関連、民族や民俗学との照合がなお一層深まって後に、歴史学に組みこまれていくものと思うのである。



第1図 遺跡の位置



## Ⅲ 層 序

本遺跡は、当地特有の粘土質の強い土壌で覆われているが、特に南側の斜面は層厚が數十センチにも及ぶ強い粘土層がみられる。

第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 粘土層 粘性強固である。

## Ⅳ 遺 構 と 遺 物

小金平・立石遺跡では、縄文時代前期の住居址1棟、奈良時代の住居址1棟、平安時代の住居址1棟の3棟の住居址が検出された。

縄文時代の住居址は台地の南傾斜面中程で確認された。規模は長辺が約4mと小形であった。炉は石囲い炉ではば中央に構築される。

遺物は、深鉢の破片が十数点と黒曜石の剥片が出土した。

奈良時代に帰属する住居址は平安時代の住居址に壊された状態で検出された。カマドは相浜層の砂岩を四角に面取りしたものを袖部の補強材として使用し、北壁にとりつけられていた。遺物は須恵器の坏等が出土している。

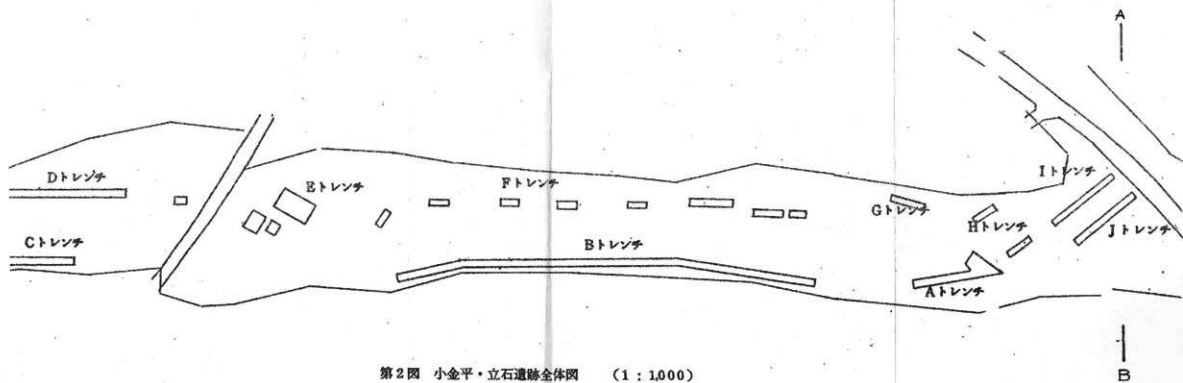
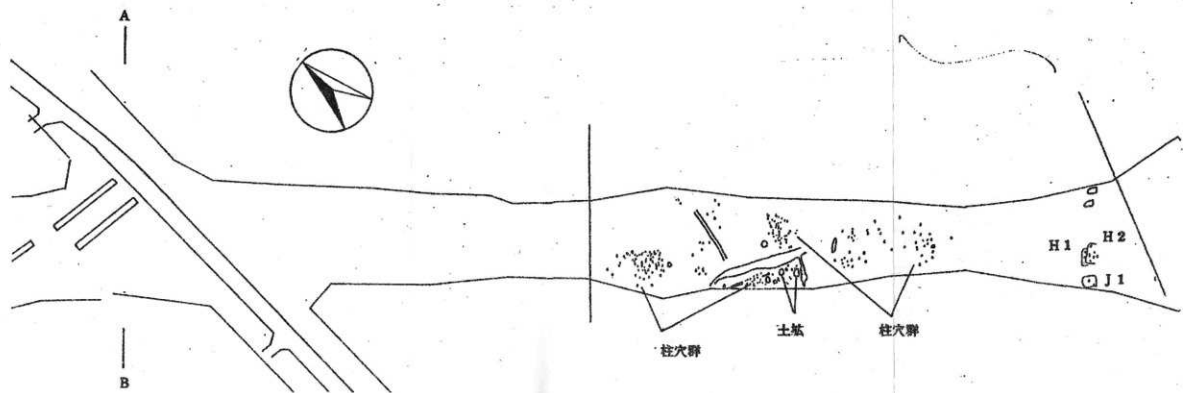
平安時代の住居址は、奈良時代の住居址と重複して構築されており、内面黒色研磨の坏を含む4個体の坏が出土した。

また調査地平坦地からは、数棟の柱状ビット群が検出され掘立址の存在が予想される。

その周辺からは大小の土壌が数基存在し、焼土・炭化物を含むものがある。これらの遺構内や周辺から多量の鉄滓やずっしりと重量の重い鉄滓が出土した。

このような多量の鉄滓はどのような鉄に関する作業の痕跡であろうか。伴出した内耳土器等より中世において岸野地区付近に多量の製鉄址品を生産せしめた歴史事象があったといえよう。

本遺跡の発掘調査により、岸野地区及び佐久平の縄文時代から中世に渡る6、7千年前～400年前までの遺跡の分布・足どりがより鮮明にされる事になったといえよう。



第2図 小金平・立石遺跡全体図 (1:1000)